

プレ・エディプス期からエディプス期への移行における 父親出現に関する理論の紹介

浴野 雅子¹⁾

An Introduction to Some Theories Related to the Emergence of the Father Figure/Image in the Transition from the Pre-Oedipal to the Oedipal Phase

Masako EKINO

要約：本稿では、精神分析の中核的概念であるエディプス・コンプレックス形成期と、それ以前のプレ・エディプス期における母子関係、そしてそこから出現するであろう父親像を幾つかの理論を参照しながら検討した。乳幼児の観察研究を行った Abelin (1975) は18ヶ月までに子どもが母親と異なる“汚れていない”父親を捉えていると考えた。対象関係論の Klein (1928/1983) は母親の中にある乳房やペニスから両親結合像を論じた。Gaddini (1976) は内的な母親から突然、外に母親とは非本質的な恐ろしい異形が現れ、それが減数分裂して母親と父親になると考えた。また、Green (2000/2021) は母親の中の潜在的な父親像から実在として子どもの認識ができてくる過程を考えた。観察研究ではプレ・エディプス期に子どもは父親を認識しているが、初期の内界や幻想の世界を重視する対象関係論では、両親結合像に多くの四肢を見ている知見が示された。また、この時期、父親は子—母の二者関係から子どもの原始的な攻撃性の緩衝帯となる役割、距離をおいた観察者、上訴裁判所的役割が考えられた。

キーワード：母子関係、父親、プレ・エディプス期、エディプス期

1. はじめに

飛び出す絵本という本を開くと立体の造形ができあがる、摩訶不思議な絵本がある。2次元の平面にたたまれていた絵がまさに飛び出て3次元の立体構造となり、そこには奥行きができ影ができあがる。物質や時空間の次元を人間発達に例えることはかなりの飛躍があるであろうが、精神分析でいう母子の二者—対の関係から母子父の三者関係への移行も、母子という濃密な二人から、外か

ら開く、やってくる父親という三番目の力が入ることで、立体という現実空間に子どもの精神世界が開かれていくであろう。浅田 (1981) もラカン
の理論から“イマジナルな平面における双数的
関係が、母子の密室において特徴的に見出され
る”、“密室に介入し、禁止の言葉によってそれを
外の社会に開く存在は父において他にない”と論
じている。この二者関係から三者関係に至る精神
の基盤が組成される時期は、約3年間であるとし
ても、本能衝動や欲求の塊という未分化な心と不
確かな外界認知の状態にありつつも、愛情のある

1) 広島文教大学人間科学部心理学科

養育を受けることで、体に心が宿り、内外に通じ合える人間としての精神が組成されていく。つまり、その親子の相互関係を通して、人間関係の原型を作っていく重要かつ複雑な激動の時期ともいえる。

2. プレ・エディプス期からエディプス期へ

Freud (1909) はハンス少年のエディプス・コンプレックスから去勢の葛藤があったことを述べ、エディプス王の悲劇の神話を幼児の親子関係の発達に援用し、エディプス葛藤を神経症の中核としてとらえた。Freud はエディプスを主人公にしているが、神話ではこの悲劇は父ライオスの少年愛に端を発し、その傷つけられた少年クリュシッポスの恨み、あるいはヘラによる罰によると考えられている(呉, 1994; Kancyper, 2006; Aisenstein, 2009)。つまり、出生前の両親2人をもつエディプス・フィールドが先であるという着想(Kancyper, 2006)もできるが、本稿では子どもから両親像をとらえるために、プレ・エディプス期からの時間軸で考えていく。

Freud の男根中心主義の理論はその後、現代まで様々な批判的討論がなされてきた(北村, 2020)。Diamond (1998) は“男根中心主義の偏りと女性性発達の限定的見解が、精神分析理論の内外から明瞭な説得力をもち、特にプレ・エディプス期において定式化されてきたように、発達理論の母親中心主義が逆説的に考えられた。～養育への要求に対応しなければならない母親中心主義の葛藤が、精神分析の革命を特徴づけた。母親の重要性により父親を背景に押しやった”と批判し、発達段階各々における父親役割の特徴を論じている。また、Etchegoyen (2002) は、現代は、父親は異なる形で現れ、エディプス・コンプレックスは異なる意味をもち、子どもとの直接的な関係および母親との関係を通じた間接的な関係、これらの両方において、父親との初期の関係の重要性は、一般的に認識されていると言及している。さらに、Freeman (2008) は、エディプス・コンプレックス理論の背景にある家父長制は、弾力性の欠けた象徴的権威であるので、現代の多様な家族の中に、父親の複雑性や親密性を組み込んだプレ・エディプス期の再評価が必要と述べている。

つまり、3歳時に急激に父親の存在を幼児は認識するのではなく、それ以前のプレ・エディプス期に父親像をもつ、あるいは外界に父親を認識しているとする論は多く、母子の二者関係が濃厚な時期の子どもの葛藤解決や初期発達のために、父親の出現がいかなる存在となり、また役割があるのであろうか。特に、現代は父親が家事育児を行うことへ社会の要請が強まったこともあり、3歳以前の父親の出現や役割の探求が求められているであろう。よって、父親は肉体的な結びつきが強い母子間に、また子どもの心の中に、あるいは外界の現実世界に一体、どのような像で現れ、子どもの精神内外でどのような布置になり、そしてその心理的な意味や特徴が考えられているのだろうか。プレ・エディプス期は観察研究や精神分析理論において多くが論じられているので、その理論や知見、考え方をいくつか紹介し、比較検討したい。

3. 父親はどこからどのようにやってくるのか

Birksted-Breen (1993) は通時的(主にアングロサクソン)と共時的(フランス)との文化的区分の視座について言及し、通時的アプローチは子どもから大人への発達に関したものであり、観察と生物学的データにもとづき、共時的アプローチは心の構造やそれらがどのように相互に関係しているかについて焦点をあてているという。本稿でも観察研究という通時的視座と内的世界、観念、象徴といった共時的視座からの理論や概念を図示化しながら考えていきたい。

1) 再接近期の父親存在がもたらす子どもの欲望の認識

最初に乳児の特に父親についての観察研究を行った Abelin (1975) の大変著名な研究を紹介する。彼は、よちよち歩きの乳幼児が強くとらえる対象は母父であり、その関係性を察知し内在化する経験を“早期の三角測量”と命名した。生後18か月までに乳児は母親との関係に加えて一対一の関係、最も典型的なのは父親との関係が発達し、そして母父がカップルであると認知すると述べて、次のように2つの段階を論じている。

母父が相互に関係していると乳幼児が体験

すると自分の気持ちを映し出す人がいないことに“取り残された”と感じ、このライバルの行動で自分の欲求不満を“認識”する以外に何もできない。つまり、“彼と同じように彼女を欲しがっている私がいるに違いない”と考える。

“早期の三角測量”の最初の三角形は父親は“汚れていない”対象であるため、母親—赤ん坊—自己であり～大きさや年齢といった順序から自己を確立し、これを“世代識別”と呼んだ(図1)。～(その後の)父親—母親—自己での適切な三角測量は、“ジェンダーアイデンティティ”の最初の非鏡像的感觉を確立するだろう(図2)。～女兒は最初の直線的三者関係(図1)が容易に確立され、男児は後者(図2)がより容易に確立される傾向がある。

乳幼児の分離—個体化研究を行った Mahler (1975/1981) も、再接近期に“非常に早くから父親は一つの愛情対象として母親とは全く異なる範疇の愛情対象に属している。父親は共生的な結合体の全く外にいるわけでもないし、全くその一部になっているわけでもない。さらに子どもはおそらく非常に早くから父親の母親に対する特殊な関係に気づく”と述べている。

また、Benjamin (1998/2018) は、プレ・エディ

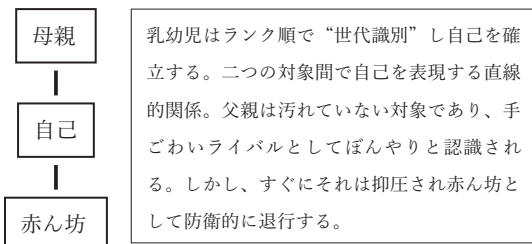


図1 Abelin (1975) 乳幼児の世代識別の図

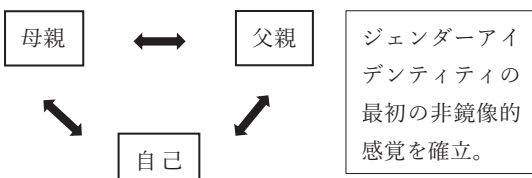


図2 Abelin (1975) 乳幼児の父親認識の図

プス期に男児も女児も一時的な親から脱同一化せず、再接近期の間に母親と父親をそれぞれ“よいものの源”と“欲望の主体”として区別し、“自分を魅了する引力が対象から発しているかのように経験される、感覚運動性の具体的認知から、主観的で象徴的なモードへと移行”するという。つまり、子どもは、父親あるいはそれに類する人物が“志向性や原著者性を表現しているのを見ること”によって“欲望の主体”となる能力を象徴的に心に描くと論じている。そして“再接近期において子どもは、あの刺激的で抗しがたい魅力をもつ、外の世界を象徴する父親と情事をもつ”と述べている。

18か月の再接近期という母親に対して両価的な感情が高まる時に、“汚れていない”対象である父親を捉え、魅力を感じる乳幼児の態度は理解されうる。だが一方で、乳幼児の視知覚や認知処理の発達は未熟であり、様々な幻想、空想を保持していることは対象関係論者が多くを述べていることである。よって、次に精神分析の対象関係論からの子どもの心的内界にできあがる母親像から父親像の出現を考えていく。

2) 母親の内界にいる父親あるいはそこからの出現

子どもの内界にできあがる母親像について、対象関係論では、まず Klein (1928/1983) の理論があげられる。彼女は1歳の終わりから2歳の初めにかけてエディプス傾向が出現すると考え、それを早期エディプス・コンプレックスと称した。つまり、超自我が前性器期と結びつき、罪悪感は支配的で口愛的・肛門愛的サディズム期に属するため、超自我はサディスティックな厳格さを持ち、これらの時期が最も優勢な時に現れてくると述べている。そして、母親の体内に子どもが羨望し、欲するものが存在しているという考えであり、知識を求める衝動とサディズムが早期に結びつき、それが母親の身体に向けられ身体内を詮索すると論じている。そしてこの考えについて祖父江(2004)は“子どもは性交中の両親像、母親の身体内部のペニスや赤ん坊と活発的な幻想の対象関係”を営み、離乳の時期に早期エディプスは最高潮に達し、フラストレーションから母親の乳房か

ら目を逸らし、父親のペニスが第二の乳房のような重要な内的対象として取り入れられるという。その一方、それに象徴される父親への存在の気づきが“結合両親像”という幻想を発展させ、そこに子どもの嫉妬や羨望が歪曲され、それが不気味で奇怪な姿になるとまとめている(図3)。

Kleinの理論は子どもの内界を中心とした理論であるが、乳児の内的対象であった母親がそれとは非本質的な(extraneous)異形として現れ、そこから分裂する父親という興味深い考え方をしているのは、次のGaddini(1976)である。

彼は、子どもの内的対象であった母親は、子どもの自己とは異なり母親とは非本質的な恐ろしいものとして表象され外界に突然現れ、母親はサイズが2倍に見え、手足は2倍数と見られると記述している。そして、この長い過程の最後に圧倒的な万能感の究極の表現として、母親は2つの姿に分かれ、父親は対象という意味はなく、母親の減数分裂の複製物、分裂したものであり、母親自身と関係を持つものとしてでてくると述べている

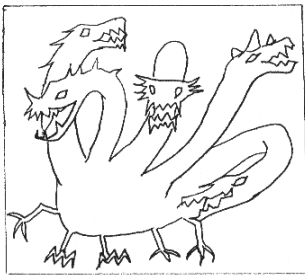


図3 子どもの描く結合両親像のイメージ図
(祖父江, 2004)

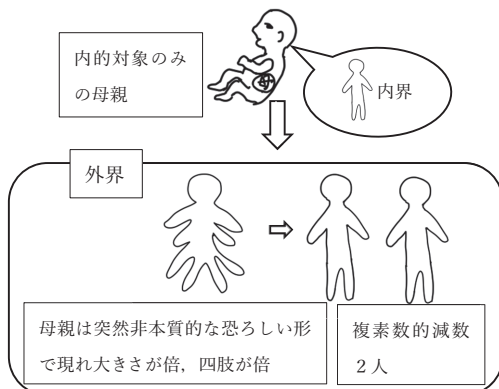


図4 Gaddini(1976)の母から父の分裂の図

(図4)。“子どもはその分裂の中で振動し、父親を母親であり養育者であると認識”し、“父親は母親からやってくる外界から最初に現れる対象”であり、父親の独自性が母親との区分を決めて、子どもはそれぞれにおける違いを十分に体験する(Gaddini, 1976)。

母親から分裂したもう一方の人が父親と考えられていく過程は、容易に想像しにくいですが、Gaddini(1976)は蜘蛛をイメージした事例から考えたようである。またKleinの結合両親像について、前述の図3のような多頭多肢の怪物を祖父江(2004)は考え図示している。これも多くの顔や肢が描かれている。Gaddini(1976)は内界から外界への移行とその知覚の変化の見解を述べているが、父親という想定すらなく母親の体しか体験していない時期の乳児が、知覚が未発達で内界の幻想や空想が豊かであることや現実に原光景を見聞したとすると、やはりKleinのいう結合両親像、多くの四肢をもつ像として外界を捉えることは考えられるのかもしれない。なお、図5はチベット仏教の異形の仏のカーラチャクラ(時論仏)の曼荼羅である。これは“仏教が獲得しえたあらゆる知識を網羅”し、ヤブ(男尊)がユム(女尊)を抱く図であり、最終到達点の異形の仏であり“その身体は宇宙と同じ大きさであり、その活動は宇宙の活動そのものとされる”(正木, 2020)。この図も2体が重なり多肢である。Gaddini(1976)の図4の子どもの抱く蒼古的イメージが、仏画と近似している点は興味深く思われる。



図5 カーラチャクラの曼荼羅(正木, 2020)

3) 母親の欲望をみたく父親あるいは欲望の中 にいる父親

Abelin (1971) は母親と父親の関係性をとらえていく子どもの視点を述べていたが、フランスの精神分析家 Lacan (1966/1981) は、母親の欲望を満たす存在としてのファルスを考えている。しかし、実際の父親ではなく、象徴としての観念的な父親について研究している。

福原 (2005) の Lacan の概説書によると、“母子一体の共生的段階にある子どもは、母の瞳を見つめ、そこに映る彼女の望むもの、母の渴望する欲望の対象になりたいと思う”ために、“子どもは母の欲望の対象に想像的に同一化することで、彼の欲望は母親の欲望の欲望として形成される。～自他内外の区別を見失う子どもは、母の欲望の複製として自己の欲望を見出し、母の微笑む外部の鏡像に自己の収束点を見て、自己疎外的な像の周りに自分というものを作り上げていくことになる”という。しかし、“母親の本当の関心は自分を乗り越えて未来永劫の彼方へと、つまり究極の対象としての父の方へと向かっている。母に欲望を与えることのできる特権的な位置に、母子という二者関係を超越する第三項としての父を置く。そして、子どもは母の欲望への呪縛から離れて、母との融合を基礎にする鏡像的な関係を解かれていく。その両者の関係は、父なる第三の認証を経由する、象徴的な次元に移動していく”と解説している。子どもの自己は去勢されて、象徴としての言語“父の名”に結びつき、文化に入っていくと考えられる (Etchegoyen, 2002)。

Green (2000/2021) も、母親の心の中の父親という設定を考えているが、より現実的な父親への子どもの認識の変化を述べている (図6)。発達の観点に関する本当の問題は、“2から3への旅ではなく、(父親が母親のこのところの中だけに存

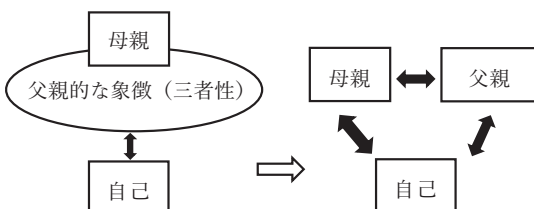


図6 Green (2000/2021) の乳幼児の父親認識図

在する) 潜在的な三者性の段階から、父親がはっきりとした対象として子どもに認識されるといった実際上の三者性へと移行すること”であり、“母親のこのところという場所に内的に存在している父親から、父親がその表象と同様に子どもの認識の中に実在する存在になるという旅”と述べている。一つ目は独立に向けた途上の母親と子どもの分離、二つ目は、それまでの関係では邪魔者である第三者への気づきに関連するという。

4) 緩衝地帯、距離を置いた観察者、上訴裁判所 としての父親役割

プレ・エディプス期の父親役割を最後にいくつかあげておきたい。

Henderson (1980) は プレ・エディプス期の父親は子どもの“敵意と原始的な攻撃性を吸収すること”によって“緩衝地帯”または“第二の意図による治癒の促進者”として機能するという。つまり、子どもは父親との関係において、母子間で感じた欲求不満を出すといった“賭け”(新しい対象に攻撃性を出すこと—筆者)が子どもにとって破滅的なものにはならず、またそれが安全で中和された結果となる第二の可能性が父子関係にはありうると述べている。よって、そこで子どもは激しい攻撃の衝動(口唇的、肛門的サディズム)を表出し、そしてそれを再体験するであろうと論じている。これは Abelin (1971) のいう“汚れていない”父親に、両価的な感情をもった子どもが魅かれ、その気持ちを向けていくことに通じているように考えられる。

また、Green (2009) は、母子一対から父親が距離をおきながらも観察者として存在し、その満足のいく状況の全ての限界がそこに帰属すると述べている。Abelin (1975) は、父親の最も初期のイメージは、母親のイメージよりも数週間遅れてもう一方の親として、また可能な上訴裁判所として登場し、子どもの両価的な感情への満足のいく解決になると論じている。

この時期の父親イメージを Kancyper (2006) は、上半身が人間で、下半身が馬という神獣のケンタロウスに例え、このような神聖な存在であるからこそ母子関係の中に入れていけるという。そして、母子間を横切り切断すること、分離させる役割も

述べている。浴野（2013）も父親を白馬（つまり汚れていない）に乗った王子様に例えているが、白馬と王子を融合するとケンタロウスになるだろう。

このように、父親が動物的な本能や躍動感をもって母子間に闖入することで、子どもは母親の気持ちもそちらに向くこと（Lacan, 1966/1981; Abelin, 1975; Green, 2000/2021）や、そして、自分自身にも欲望があることに気づくこととなる（Abelin, 1975; Benjamin, 1998/2018）。そこに三者関係の萌芽がもたらされるであろう。また、人間の頭をもつ上半身のイメージは、裁判所や観察者としての裁断する掟、物事の是非の判断基準を父親が持っていることを表すであろう。

つまり、父親は“汚れていない”新しい対象として、子どもが母親との欲求不満や攻撃性をぶつけられるエネルギー表出の練習台であり、なおかつそのエネルギーを受け止めその是非を判断し調整しながら、子どもに適切なエネルギー表出や行動を教えることができる。このような過程によって、父親は、母子の二者関係から第三者の世界へと、子どもの分離を促進し、そのエネルギーの加減を学ばせる役割を果たすであろう。

4. まとめ

乳幼児期の父親についての観察研究と、幻想あるいは象徴としての父親といった精神内界中心の理論の比較検討を行った。Abelin（1975）の研究は、再接近期を重視し、その時期には母親とは異なる父親を認識すると述べ、Gaddini（1976）は、母親とは非本質的な異形から父親が分裂すると考えた。Benjamin（1998/2018）は再接近期に、子どもが欲望をもつ父親をとらえることで子ども自身が欲望をもち、主体的になると論じた。Green（2000/2021）は、母親の中に父親的イメージ（あるいはその他の人）が存在することから次第に父親が実在してくると考えた。そして、Kancyper（2006）は、父親をケンタロウスに例えていたが、父親は馬のような欲望をもった存在であるとともに、一方では子どもの攻撃性を受け止め、母子から距離をおいて眺めたり考えたりする上級裁判のような存在が考えられた。そして、最終的には子どもの分離を促すことになるであろう。

以上、プレ・エディプス期からエディプス期の乳幼児の現実的な存在としての父親認知、また幻想的世界、あるいは内界から外界への存在の出現などについて、精神分析家の幾つかの理論を概観することで、母親と父親の比較や母親の心にある父親、母親からの父親の出現、またその過程における父親の役割のいくつかを検討した。言語化できない乳幼児の世界を明確にすることは多くの限界があるものの、観察研究や臨床事例研究を通じて、今後も子どもの精神の初期発達にとっての父親の存在や役割重要性の探求が求められるものと思われる。

文献

- Abelin, E.L. (1975). Some further observations and comments on the earliest role of the father. *International Journal of Psycho-analysis*, **56**, 293-302.
- Aisenstein, M. (2009). The death of the dead father? Kalinnich, L. J. & Taylor, S. W. (Eds) In *The dead father*. London: Routledge, pp.1-8.
- 浅田 彰 (1981). ラカン 構造主義のリミットとしての 三浦雅士 (編) 現代思想ラカン 青土社, pp.90-105.
- Birksted-Breen, D. (1993). General Introduction. In *The Gender Conundrum*. London: Routledge, pp. 1-39.
- 浴野雅子 (2013). 現代の父親についての臨床心理学的一考察 広島文教女子大学紀要, **48**, 29-36.
- Etchegoyen, A. (2002). Fathers in the internal world: from boy to man to father. Trowell, J. & Etchegoyen, A. (Eds.), In *The importance of fathers: A psychoanalytic re-evolution*, London: Routledge, pp. 67-92.
- Freeman, T. (2008). Psychoanalytic concepts of fatherhood: Patriarchal paradoxes and the presence of an absent authority. *Studies in Gender and Sexuality*, **9**, 113-139.
- Freud, S. (1909). Analysis of a phobia in a five-year-old-boy. In J. Strachey (ed), In *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud (Vol. 10, pp.1-147)*.

- London :Hogarth Press.
- 福原泰平 (2005). ラカン—鏡像段階 講談社.
- Gadini, E. (1976). Discussion of 'the role of family life in child development'. *International Journal of Psycho-analysis*, **57**, 397-401.
- Green, A. (2000). *The squiggle foundation*. Abram, J. (Ed). Karnac Books Ltd. London. (鈴木智美・石橋大樹 (訳) (2021). アンドレ・グリーン・レクチャー ウィニコットと遊ぶ 金剛出版)
- Green, A. (2009). The construction of the lost father. Kalinnich, L. J. & Taylor, S. W. (Eds) In *The dead father*. London: Routledge, pp.23-46.
- Henderson, J. (1980). On fathering (The nature and functions of the father role) Part II: Conceptualization of fathering. *Canadian Journal of Psychiatry*, **25**, 413-431.
- Kancyper, L. (2006). The role of pre-oedipal and oedipal factors in psychic life. *International Journal of Psychoanalysis*, **87**, 219-36.
- 北村婦美 (2020). 精神分析とフェミニズム—その対立と融合の歴史. 西 見奈子 (編著)・北村婦美・鈴木菜実子・松本卓也 精神分析にとって女とは何か. 福村出版. pp.1-60.
- Klein, M. (1928). Early stage of the Oedipus conflict. Money-Kyrle, R. (Ed.) (1975). *The writing of Melanie Klein Vol.1. Love, guilt, and separation and other works* (1921-1931). London: Hogarth Press. (柴山謙二 (訳) (1983). エディプス葛藤の早期段階. 西園昌久・牛島定信 (編訳), メラニー・クライン著作集1 子どもの心的発達. 誠信書房, pp. 225-238.)
- 呉 茂一 (1994). ギリシャ神話 新潮社.
- Lacan, A. (1966). Die bedeutung des phallus. *Ecrits*. Editions du Seuil, France. (佐々木孝次・海老原英彦・芦原 脊 (1981). エクリⅢ, 弘文堂.)
- Mahler, M.S., Pine, P. & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant*. Basic Books Inc., New York. (高橋雅士・織田正美・浜畑 紀 (訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生. 黎明書房.)
- 正木 晃 (2020). マンダラ図鑑. エクスナレッジ.
- 祖父江典人 (2004) 早期エディプス・コンプレックス論とその変遷. 松木邦裕 (編) オールアウト「メラニー・クライン」至文堂, pp.112-122.